

まで知られる限りの学説史上の記録には何の交渉はおろか、言及さえなされていない。しかるに両者の社会学における努力はParsonsが*Structure of Social Action*で論じたように収斂の方向を示しているとも見られるし、また経済的制度の非経済側面への両者の深い関心も類似している。にも拘らず、両者がともに相手方の存在にも気づかなかったというのは何故なのか。こういう疑問に答えて、ティリアキアンは両者のnationalism(国民文化に対する愛着による対立なのか、もしnationalismによるものとすれば、それは両手の巨人像をくじくことになる。あるいは当時Weberは経済史の専門家と見られていてから社会学者デュルケームは気づかなかったとも考えられる<sup>34)</sup>。しかしティリアキアンは断定できないので問題の提起をしたに止まっていた<sup>35)</sup>。しかし、その後Hirschhornはこの問題提起から約20年ほどおいてこの問題だけでなくウェーバーのフランス社会学の関係の問題を詳しく検討する著作を刊行した。これが*Max Weber et la sociologie française* 1988(L'Harmattan)である。この書の第一章はMax WeberとE. Durkheimでこの章<sup>36)</sup>はWeberとDurkheimの両巨頭の接近が何故行わなかったのか、の問題についてティリアキヤンの問題とは別の立場から一つの回答を出しているのである。それはティリアキヤンが見のがしていた点を明らかにして、両者の行きちがいが相当の根拠のあることを示している。この回答を次に要約して見ると、第一点はウェーバーの著作が社会学年報で無視されたのではなく、彼の著作「古代における農業関係」*Agrarverhältnisse im Altertum* (1897)は年報第二巻にSimiandによって批評されているのである。このほか年報の書評で四点の著作がとりあげられているのである<sup>37)</sup>。HirschhornによるとSimiandがとりあげたの

はこのほか年報第三巻にWeberやLamprechtなどの編著「農業史(*Agrargeschichte*、社会学年報第四巻に掲載された*Die Land-arbeiter in den evangelischen Gebieten Norddeutschlands*(北ドイツ新教徒地区の農業労働者)に対する批評などがあるが、有名な「プロテスタントの倫理と資本主義の精神」に対する書評も年報第十巻において刊行されているのである。だからティリアキヤンの考えたような相互のunawarenessではなく正しくフランス側の明白な無視によることなのである<sup>38)</sup>。つまり、19世紀から20世紀の初めにおけるフランスの大学の空気の中においてはそうした無視はデュルケーム及びデュルケーム派一同の正当視的戦略によるものと見られるのである<sup>39)</sup>。そしてWeber、Durkheimの本当の意味での接近が実現したのはデュルケーム死後のHalbwachsの手によって可能となったのである<sup>40)</sup>。それにこの社会学年報第一輯の刊行された時期においてイギリス、アメリカなどの国でもWeberは注目されておらず、Steinerによると*The Economic Journal* (1896-1930)、*Sociological Review* (1898-1930)およびA. J. S. (1897-1930)においてもWeberには全く言及されていなかったのである。フランスにおいてM. Weberを高く評価して、彼を社会学に導入したのはむしろ戦後R. Aronの努力によるものである。筆者はジンメルは年報の第一巻にすでに論文を発表しているのにMax Weberに対してデュルケーム派の人々の眼が冴めなかったのはジンメルはKant的色彩が強いが、Weberはむしろ西南学派から生の哲学へと志向していたDiltheyに強く影響されたからであったと見られるのではないかと考える。20世紀の初期にはこのようにWeberに対する認識は全般に低かったため、Weberはフランスでも余り顧みられなかったのではないかと考えられる。現

34) E. Tiryakian, *op. cit.* p. 330-335.

35) E. Tiryakian, *op. cit.* p. 335-336.

36) この第一章はp. 35-54.にわたる長文のものである。

37) Monique Hirschhorn, *Max Weber et la sociologie française* p. 35-54.

38) 「プロテスタント倫理と資本主義の精神」はArchiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik 21.に出たp. 1-110.までの部分であるが、原著の大部分はそこにつくされているといえる。

39) Ph. Steiner, *op. cit.*, in A. E. S. n°2, 1992

40) M. Halbwachsは1925年の*Revue d'histoire et de philosophie religieuse*で資本主義の精神を分析し、1929年*Annales d'histoire et sociale* pp 81-88にMax Weber, un homme, une oeuvreをかいた。